

建築的原風景の再構成 —日常がにじむ非日常のあわい—

指導教員 川又羽和
木多彩子

原風景 増田友也
日常と非日常 風化
鳴門市 再構成

1. 背景

徳島県鳴門市。江戸時代塩業が盛んで、塩田風景が広がっていた地である。明治から昭和にかけて行われた政府の製塩地整理により塩田は埋め立てられ、鳴門古来からの原風景は消えいった。

高度成長期に新しい街の建設が始まり、日本のモダニズム建築を代表する建築家増田友也によって公共建築が建てられた。増田氏は市庁舎と市民会館をはじめとし、1961年から1982年の約20年間で鳴門市に19件の公共建築を設計した。

増田氏は鳴門市庁舎竣工パンフレットに以下のように記している。「われわれの意図は、この新しい敷地に市の飛躍を視覚的に意味づけ、象徴化するところの全く新しい景観を展開することにあつた。」かつて鳴門の発展を支え、誇りでもあった塩田風景に代わる新たな風景の創造を増田氏は行った。増田建築は鳴門の原風景となっていた。ところが現在、増田建築は半数が取り壊しや閉鎖されている。中には、観光客向けに用途を転換した事例もある。「生活の核」であった公共建築と市民との間に時間軸のずれを生じさせ、増田氏の生み出した原風景がかえって風化した。



図1：鳴門の写真（左：塩田風景、右：鳴門市庁舎）（文1、2より）

2. 目的

本提案では、残存する増田建築を読み解き、市民と共に建築的原風景を再構成することを目指す。建築を残すことを目的とした用途転換や街の記憶を置き去りにして建て替えることのどちらでもない。

3. 対象敷地

対象敷地は鳴門市文化会館と鳴門市健康福祉交流センターの2棟とその間の広場である。この2棟の増田建築は撫養川対岸から象徴的な風景を映し出しており、19件の増田建築の中で特にランドマーク的存在である。この場所は、鳴門市街地の中心部に位置する。敷地の北に保育園が隣接し、徒歩圏内に小中学校があるため、子育て世代が多く住む場所である。休日は、近隣のサッカースタジアムへの来訪者が行き交う。



図2：周辺環境

住所：徳島県鳴門市撫養町南浜字東浜 24-7



図3：撫養川対岸から見る2棟の増田建築（文1より）

敷地と建築の概要

用途地域：第一種中高層住居専用地域 敷地面積：13600㎡

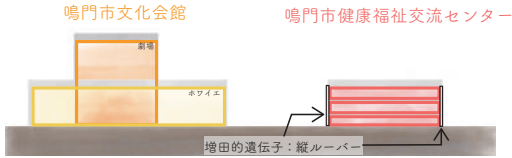
表1：建物の概要

	竣工年月	構造	建築面積	延べ床面積	本提案の増築面積	規模
鳴門市健康福祉交流センター	1977年12月	鉄筋コンクリート、一部鉄骨鉄筋コンクリート造	1038.42㎡	3211.46㎡	400㎡	地上3階、地下1階
鳴門市文化会館	1982年4月	鉄筋コンクリート、一部鉄骨鉄筋コンクリート造	4316.5㎡	7525.4㎡	840㎡	地上3階、地下1階

4. 提案

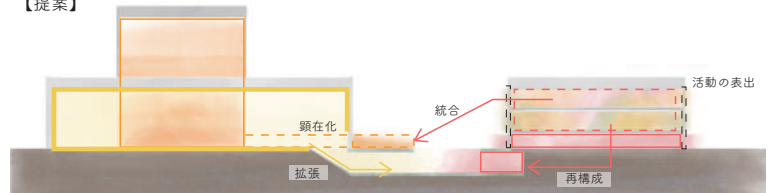
2棟の増田建築は、強い非日常性や活動と風景の断絶が建築の形骸化や原風景の風化を招いている。そこで、機能を再構成しながら一部顕在化し、2棟に共通する増田的遺伝子を再解釈することで、原風景を再構成する。

【現状】



- 文化会館**
- 音楽ホール、ホワイエ、会議室兼展示室
- 子育て世代包括支援センター**
- 子供の預かり支援
 - ネウボラ（すべての妊婦・子育て家庭への相談支援）
 - 相談室・沐浴室
 - 交流室・軽運動室（読み聞かせ、ヨガ教室、阿波踊り練習場など）
 - 家庭・児童虐待相談室
 - 調理室

【提案】



- | | |
|---|---|
| <p>拡張</p> <p>日常に溶け出る
非日常を象徴するホワイエ空間
を外に緩やかに繋げながら拡張</p> <p>ベンチ、植栽</p> | <p>再構成</p> <p>日常の抛り所
家庭・児童虐待相談室
ピラティスルーム
（前・軽運動室）</p> <p>地域コミュニティ形成の場として</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ネウボラ ・子供の預かり支援 |
| <p>顕在化と統合</p> <p>屋外舞台
市民に開放した舞台</p> <p>部活動の発表会、阿波踊りの練習場として活用</p> | <p>追加</p> <p>集合住宅
対象世帯：
片親世帯（長期）、移住者（中期）、移住希望者・観光客（短期）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・シェアキッチン ・工房 ・シェアラウンジ ・ヨガルーム |

図4：提案ダイアグラム

5. 設計

本提案は、図5ABCの3つの計画で構成されている。

Aでは、既存の舞台を拡張し、市民の文化活動を促進する屋外舞台と文化会館の主動線上に街に開いたエントランスを増築。

Bでは、文化会館に新たなシークエンスを挿入し、日常と非日常が交わる地下広場を設計した。

Cでは、増田的遺伝子である縦ルーバーを再解釈し、新たに集合住宅を挿入することで、非日常的風景に日常が滲む設計をした。

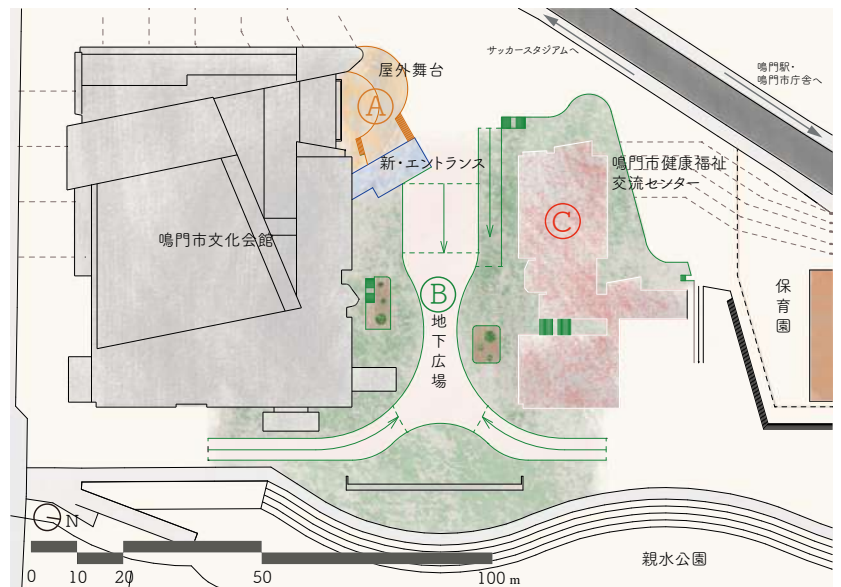
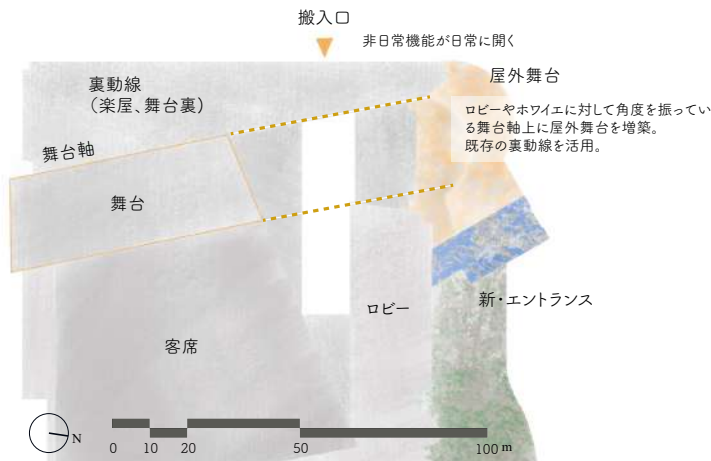
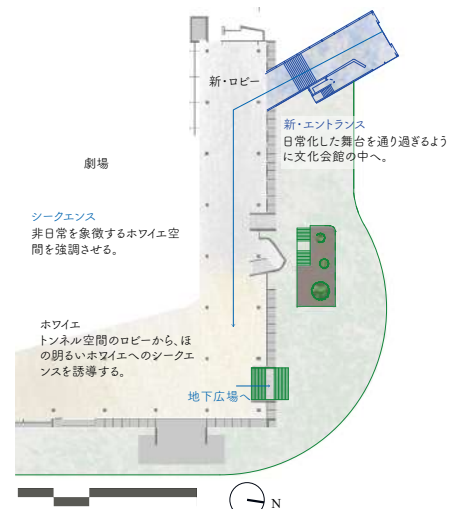


図5：配置図

5-A：鳴門市文化会館—非日常の日常化—（小改築）



図A-1：ダイアグラム



図A-2：文化会館詳細平面図

5-B：地下広場 —日常と非日常のあわい— （新たなシークエンスの挿入）

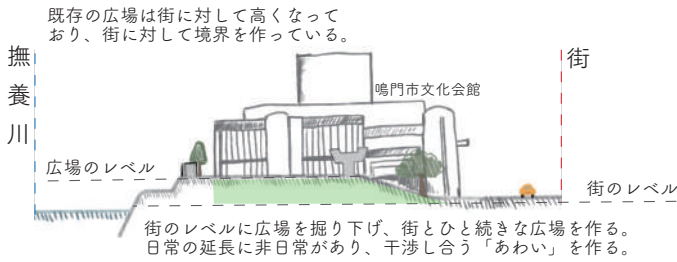


図 B-1：広場のダイアグラム

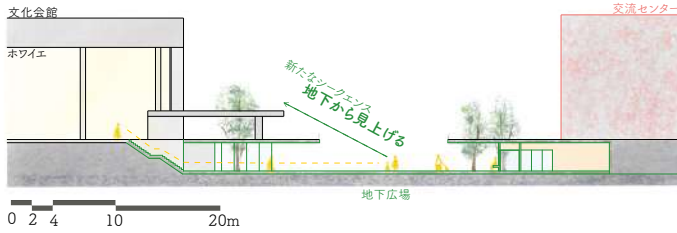


図 B-3：B-B' 断面図

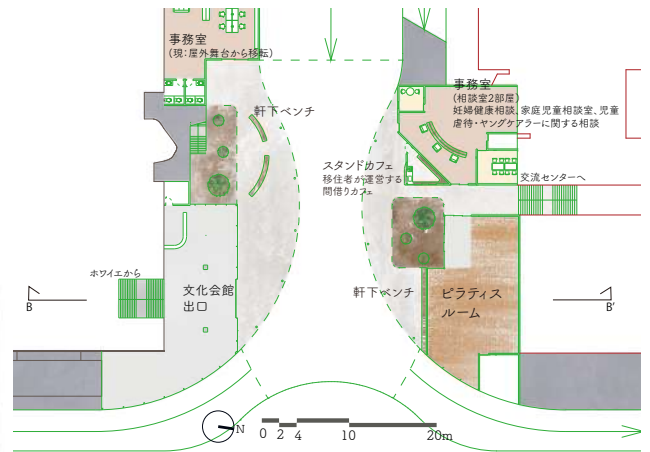


図 B-2：地下広場詳細平面図

5-C：鳴門市健康福祉交流センター —日常がにじむ— （スケルトン化改築）

設計手法：増田的遺伝子の再解釈

縦ルーバー：半隔離と象徴の原点

2 棟の増田建築に共通して用いられている縦ルーバー。一定のリズムで配置され、建築の表皮である。撫養川対岸の風景を構成する中で、特有のリズム感是非日常を象徴する大きな要素である。内部空間では、「半隔離」的な役割を担う。障子のように、人は通さずに光を通すことで、内部は日光を享受したほんのり明るい空間を作り出す。

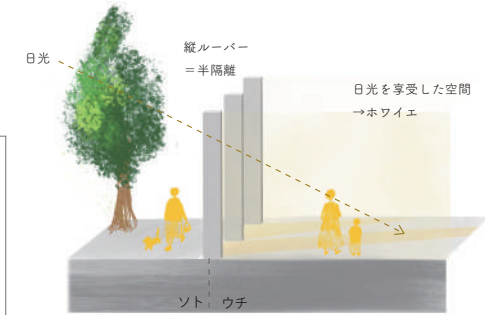
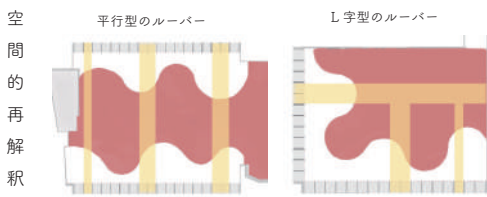
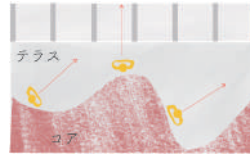
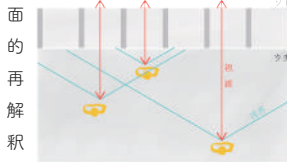


図 C-1：ルーバーの半隔離ダイアグラム

再解釈

ルーバーに対して面、空間、暮らしの3種類の再解釈を行った。



ルーバーに促して視線が抜ける路地空間を設ける。視線の抜けはソトからウチをみる時、活動の表出に奥行きが現れる。平行型は活動を断片的に表出させ、L字型は活動に中心性を持たせる。

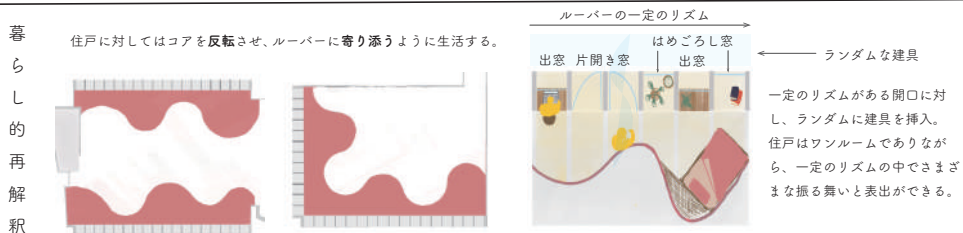


図 C-2：ルーバーの再解釈ダイアグラム

6. まとめ

鈴木博之は「建築は記憶の器である」といった。(文6)そして本提案では、建築が構成する原風景を再構成することで新たな記憶の余白を作り、器として生き続けることを提案した。増田建築がまちのアイデンティティとして、記憶を保管し続ける存在であることを願う。

5-C：鳴門市健康福祉交流センター ―日常がにじむ― (スケルトン化改築) (続き)

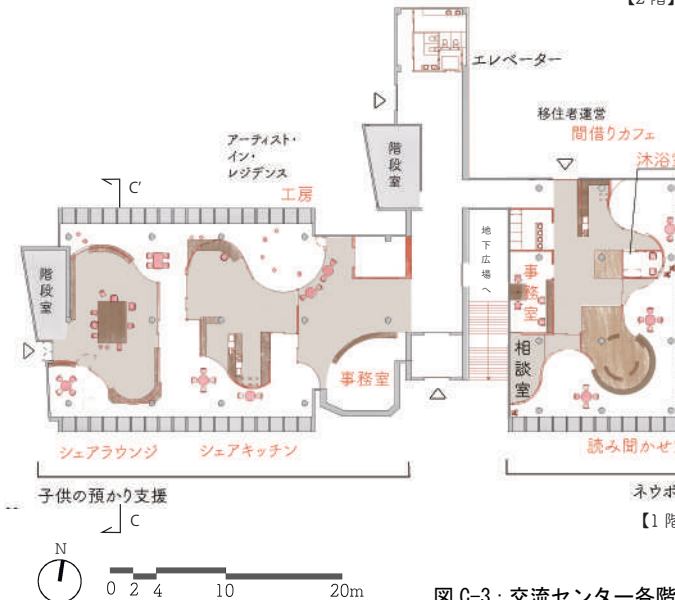
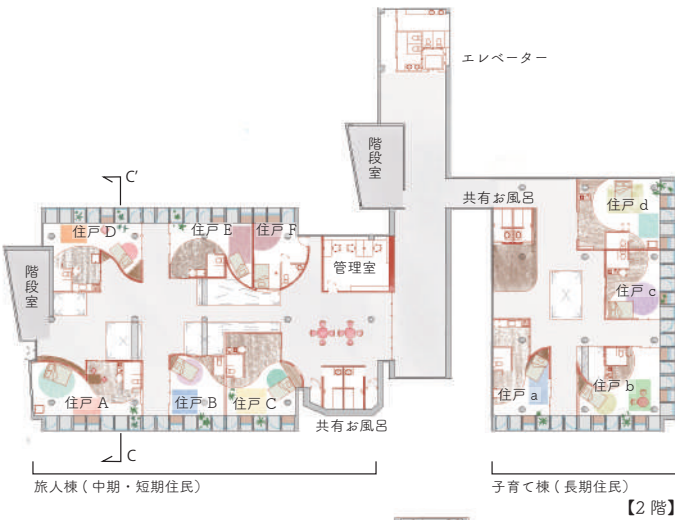
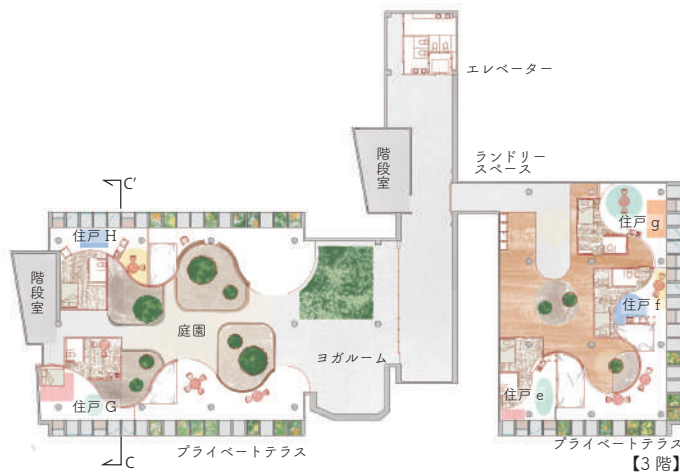


図 C-3：交流センター各階平面図

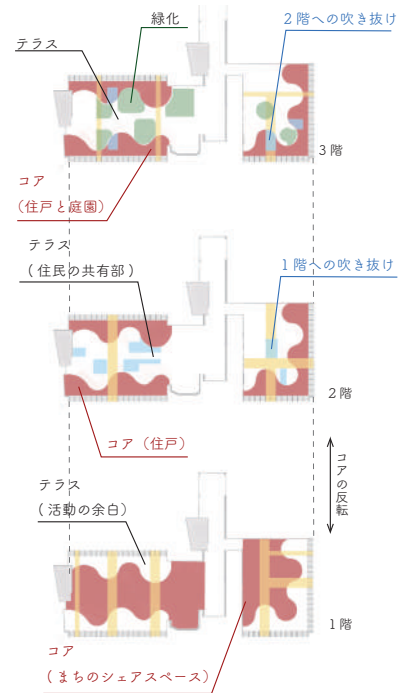


図 C-4：配置ダイアグラム



図 C-5：東立面図



図 C-6：C-C' 断面図

参考文献

- 1) 鳴門市増田友也建築デジタルアーカイブ：<https://www.city.naruto.tokushima.jp/archive/>
- 2) なつかしの写真館 鳴門の風景：https://www.city.naruto.tokushima.jp/shisei/shokai/rekishi/syashinkan_fukei.html
- 3) 国土地理院基盤地図情報：<https://www.gsi.go.jp/kiban/>
- 4) 田中恭子、鳥巢茂樹、田中明「建築空間と風景の『両義性』についての一考察―増田友也の思想を通して― 令和4年日本建築学会近畿支部研究発表会
- 5) 徳島新聞「保存か解体か鳴門に残る増田建築 特集 全16回」：<https://www.topics.or.jp/category/news-pickup/> 保存か解体か鳴門に残る増田建築
- 6) 鈴木博之、東京大学「近代建築論講義」東京大学出版会 2009.10
- 7) 鳴門市子育て世代包括支援センター：https://www.city.naruto.tokushima.jp/_files/00524858/guide2023_10-21.pdf
- 8) 鳴門市子ども家庭センター：<https://www.city.naruto.tokushima.jp/kurashi/kodomo/kosodate/center/>